

SESSION 2020

**CAPES
CONCOURS EXTERNE
ET CAFEP**

**SECTION LANGUES VIVANTES ÉTRANGÈRES :
JAPONAIS**

COMPOSITION EN JAPONAIS

Durée : 5 heures

L'usage de deux dictionnaires unilingues en langue japonaise (un dictionnaire de langue et/ou un dictionnaire de kanji) est autorisé.

L'usage de tout ouvrage de référence, de tout autre dictionnaire et de tout matériel informatique ou électronique (dictionnaire électronique, ordinateur, téléphone, calculatrice ou autre) est rigoureusement interdit.

Si vous repérez ce qui vous semble être une erreur d'énoncé, vous devez le signaler très lisiblement sur votre copie, en proposer la correction et poursuivre l'épreuve en conséquence. De même, si cela vous conduit à formuler une ou plusieurs hypothèses, vous devez la (ou les) mentionner explicitement.

NB : Conformément au principe d'anonymat, votre copie ne doit comporter aucun signe distinctif, tel que nom, signature, origine, etc. Si le travail qui vous est demandé consiste notamment en la rédaction d'un projet ou d'une note, vous devrez impérativement vous abstenir de la signer ou de l'identifier.

Tournez la page S.V.P.

Axe : Le passé dans le présent

以上のテーマについて、それぞれの次の4つの資料の比較分析に基づいて問題提起をし、構築された論文を日本語で書きなさい。

資料 1 :

父は、K共同墓地に埋葬する死亡者の名簿を、どのような経緯があったのかは知らないが、最初から作成することを思いついていたようだ。人手の少ない時期に、遺体を埋葬する作業だけでも労力のいる大変な作業なのに、あえてそれを行ったのだ。

- 5 名簿は、氏名や年齢、本籍地などを調べて一覧表にして、通し番号が付されていた。その名簿だけでなく、父には、さらに一人一人の死の詳細をも記録する意図もあったようだ。一覧表にした名簿とは別冊にして、死者の死亡原因や、戦死地、あるいは生前の様子などの記入が試みられた名簿もある。

- 10 父が、なぜ、このような作業にまで手を広げていこうとしていたのかは分からない。ただ、私にも、このような作業が困難であったらうと思われる具体的な場面を、何度か目撃したことがある。今に至って、思い当たるのだが、父は、よく人々に殴られては、地面にはいつくばっていた。たぶん、だれかれなしに、しつこく死者の身元や原因を尋ねて、煙たがられていたのだろう。

村人だけでなく、野戦病院の医者や米兵、さらに日本軍の捕虜や民間人の収容者からも、死者の身元を、しつこく尋ね回っていた。

- 15 「お前はスパイか」
「そんなことをしたって、飯の種にはならんぞ」
「やめとけ。死んだ者は生き返らん」

- 20 父は、周りの人々から口汚く怒鳴られていた。また、激しく突き飛ばされ、土の上に四つんばいになり、口から血を流している父の姿を見たこともある。もちろん、無視され、邪魔にされることも多かった。それでも、父は、あきらめずに、黙々とその作業を続けたのだ。

伯父は、当時、G村の区長をしていたから、たぶん、米軍の野戦病院から、埋葬作業を依頼されたものと思われる。

(略)

25 当初は、名簿を作るという父の行為を、村人たちは賛成していなかったように思われる。坑を掘るという作業が、滞ることもあるからだ。実際、父は身元が判明するまで、葬ることを差し止めることもあったようだ。そんな父と、遺体の腐乱が進まないうちに早く埋葬しようとする村人たちの間には、^{あつれき}軋轢もあったようだ。

30 しかし、やがて、そのような軋轢も消えて、村人たちの間にも、なにがしかの使命感が芽生えていったように思われる。皆が力を合わせて、その仕事に取り組んでいた。名簿を作るというその行為に協力する者さえ出てきた。

私の記憶の中の一つに、父が夕日に照らされながら小さな墓標を立てている姿が浮かんでくる。一人一人の遺体を埋めた場所に、父は、手作りの墓標を立てたのだ。板面だけでなく、多くは丸太木を削って、墨で黒々と死者の名簿を記しただけの質素な
35 ものだった。

(略)

埋葬地には、日を重ねるにつれて、そんな墓標が増えていった。それは、男の子たちが遊んでいる竹馬の杭が並べられて、土に突き刺さったようにも見えた。しかし、時には、土の中から死者たちの腕が、ニョキニョキと芽を出して、空しく空を掴んで
40 いるように見えた。

大城貞俊「K共同墓地死亡者名簿」2008年

(川村湊編『現代沖縄文学作品選』講談社文芸文庫、2011年)

資料 2 :

しかし、徳正が酒浸りになるようになった理由は他にあった。祖母の四十九日の席で、村の老女たちの会話から、徳正は宮城セツのことを偶然知った。

たどり着いた時、糸満の外科塚は米軍の馬乗り攻撃を受けてすでに爆破されていた。以後、宮城セツの消息はつかめないまま、徳正は島の最南端の摩文仁海岸に追い詰め
5 られていった。実は、セツたちも一日前にほとんど同じ道を通って摩文仁海岸に着いていた。そうして、徳正が爆風を受けて気を失い、漂っていた波打ち際から二百メートルも離れていない岩場で、同僚の女子学生五名と手榴弾で自決を遂げていたのだった。

10 親戚や客が帰った後、徳正は独り浜に降りた。水筒と乾パンを渡し、自分の肩に手を置いたセツの顔が浮かんだ。悲しみとそれ以上の怒りが湧いてきて、セツを死に追

いやった連中を打ち殺したかった。同時に、自分の中に、これで石嶺のことを知る者はいない、という安堵の気持ちがあるのを認めずにはおれなかった。声を上げて泣きたかったが、涙は出なかった。酒の量が一気に増えたのはそれからだった。以来、石嶺のこともセツのことも記憶の底に封じ込めて生きてきたはずだった。

- 15 徳正の足をいたわるように掌で足首を包み、石嶺は一心に水を飲んでいる。涼しい風が部屋に吹き込む。窓の外に海の彼方から生まれる光の気配がある。いつもなら、とくに姿を消している時刻だった。はだけた寝間着の間から酒でぶよぶよになった腹が見える。臍^{へそ}のまわりだけ毛の生えたその生白い腹と、冬瓜のように腫れた右足の醜さ。自分がこれから急速に老いていくのが分かった。ベッドに寝たまま、五十年余
20 ごまかしてきた記憶と死ぬまで向かい合い続けねばならないことが恐かった。

「イシミネよ、赦してとらせ……」

土気色だった石嶺の顔に赤みが差し、唇にも艶が戻っている。怯えや自己嫌悪のなかでも茎は立ち、傷口をくじる舌の感触に徳正は小さな声を漏らして精を放った。

- 唇が離れた。人差し指で軽く口を拭い、立ち上がった石嶺は、十七歳のままだった。
25 正面から見つめる^{まっげ} 睫の長い目にも、肉の薄い頬にも、朱色の唇にも微笑みが浮かんでいる。ふいに怒りが湧いた。

「この五十年の哀れ、お前が分かるか」

石嶺は笑みを浮かべて徳正を見つめるだけだった。起き上がろうともがく徳正に、石嶺は小さくうなずいた。

- 30 「ありがとう。やっと渴きがとれたよ」

きれいな標準語でそう言うと、石嶺は笑みを抑えて敬礼し、深々と頭を下げた。壁に消えるまで、石嶺は二度と徳正を見ようとはしなかった。薄汚れた壁にヤモリが這ってきて虫を捕らえた。

明け方の村に、徳正の号泣が響いた。

目取真俊「水滴」1997年（文春文庫、2000年）

資料 3 :

十日が経った。徳正は窓から裏庭の夏草を眺めていた。水が止まってから、兵隊達は二度と現れなかった。それでも一人で寝るのが不安で、三日の間はウシにベッドの横の床で寝てもらった。口とは裏腹にウシもまんざらではないようだった。明かりを

点けっ放しにしたまま、自分が寝たきりになっていた間の村の出来事を聞きながら、
5 水を飲みにきた兵隊や石嶺のことを話そうかと迷った。しかし、結局話せなかった。
これからも話すことはないだろうと思った。ただ、体調が回復したら、ウシと一緒に
あの塚を訪れてみたいと思った。戦争中、ここに隠れていたのだ、とだけ言い、花を
捧げ、遺骨を探すつもりだった。そう決意する一方で、自分はまたぐずぐずと時間を
10 引き延ばし、記憶を曖昧にして、石嶺のことを忘れようとするのではないかと不安に
なった。あれほど飲まないと言った酒も再び飲み始めていた。町で袋叩きにあってか
ら家で寝込んでいる清裕を見舞った日、居合わせた遊び仲間に誘われるまま酒を飲ん
だ。両手を骨折りして、ストローで泡盛を飲んでいて清裕が酔いつぶれた後も酒盛り
は続き、そのうち花札が始まった。翌朝、門の前で寝ていた徳正を蹴り飛ばすと、ウ
シは物も言わずに畑に出ていった。

15 ^{あちやー}明日から^{はる}や畑^{いじ}に出でてい、働くんど。

そう自分に言い聞かせて、体馴らしに伸び放題の夏草でも刈ろうと、物置から鎌を
取ってきて裏庭に下りた。腰のあたりまで伸びた雑草の勢力にあきれながら、ハブが
いないか棒切れで草の根元をあちこち叩いた。何か固い物に当たって棒の先が跳ね返
った。草を薙ぎ払いながら進むと、^{ぶっそうげ}仏桑華の生垣の下に、徳正でも抱えきれそうにな
20 い巨大な^{すぶい}冬瓜が横たわっていた。濃い緑の肌に産毛が光っている。溜息が漏れた。軽
く蹴ってみたが動きもしない。親指くらいもある蔓が冬瓜から仏桑華に伸びている。
長く伸びた蔓の先で、黄色い花が青空に揺れていた。その花の眩しさに、徳正の目は
潤んだ。

目取真俊「水滴」1997年（文春文庫、2000年）

資料 4 :

「わしも正直言って水では本当に苦労した」と本田さんは僕の質問を無視して言っ
た。

「ノモンハンにはまったく水がなかった。戦線が^{さくそう}錯綜しておって、補給というものが
途絶えてしまったのだ。水もない。食料もない。包帯もない。弾薬もない。あれはひ
5 どの戦争だった。後ろの偉いさんたちはどれだけ早くどこを占領するかということに
しか興味がないのだ。補給のことなんか誰も考えてはおらんのだ。わしは三日間ほと
んど水を飲まなかったことがある。朝に^{てぬぐ}手拭いを出しておく、それにわずかに朝露

がしみて、それを絞って数滴水を飲むことが出来たが、それだけだった。それ以外には水というものがまったくなかった。あのときは本当に死んだ方がましだと思った。

10 世の中に^{のど}喉が渴くくらいつらいことはない。こんなに喉が渴くのならいっそのこと撃たれて死んだ方がましだと思ったくらいだった。腹を撃たれた戦友たちが、水を求めて叫んでおる。気が狂ってしまったものまでおった。あれはまさに生き地獄だった。目の前に大きな川が流れておる。そこに行けば水はいくらだってあった。でもそこまで行けんかった。わしらと川のあいだには火炎放射器をつけたソ連の大型戦車がずう

15 っと並んでおった。機関銃陣地が針山みたいに並んでおった。丘の上に腕の良い^{そげきへい}狙撃兵もおった。夜中にも^{やつ}奴らはどンドン照明弾を撃ち上げていた。わしらの持つておるのは三八式歩兵銃と、一人あたり二十五発の弾丸だけじゃった。わしの戦友の多くはそれでも川に水を汲^くみに行った。我慢できんかったんじゃ。でも一人も帰ってはこんかった。みんな死んだ。なあ、じっとしておるときには、じっとしておるのがい

20 いんだ」

彼はちり紙を取って大きな音を立てて鼻をかみ、自分の鼻水をしばらく点検してから、それを丸めて捨てた。

「流れというのが出てくるのを待つのは^{つら}辛いもんだ。しかし待たねばならんときには、待たねばならん。そのあいだは死んだつもりでおればいいんだ」

25 「つまり僕はしばらくは死んだままでいたほうがいいということですか」と僕は訊いてみた。

「何？」

「つまり僕はしばらくは死んだままでいたほうがいいということですか」

「そのとおり」と彼は言った。「死んでこそ、浮かぶ瀬もあれ、ノモンハン」

村上春樹『ねじまき鳥クロニクル 第1部 泥棒かささぎ編』1994年
(新潮文庫, 1997年)

INFORMATION AUX CANDIDATS

Vous trouverez ci-après les codes nécessaires vous permettant de compléter les rubriques figurant en en-tête de votre copie.

Ces codes doivent être reportés sur chacune des copies que vous remettrez.

► **Concours externe du CAPES de l'enseignement public :**

Concours	Section/option	Epreuve	Matière
E B E	0 4 3 0 E	1 0 1	7 8 2 1

► **Concours externe du CAFEP/CAPES de l'enseignement privé :**

Concours	Section/option	Epreuve	Matière
E B F	0 4 3 0 E	1 0 1	7 8 2 1